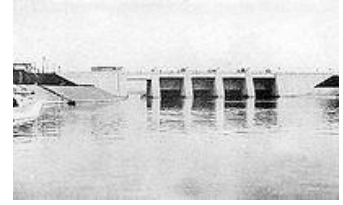


寅さん歩 その14

東京に こんなところ-13



平野 武宏

首都東京は徳川幕府の江戸から明治維新へ、そして関東大震災・太平洋戦争の被災で壊滅から復興、1964年（昭和39年）の東京オリンピックによる街並み・交通網の再整備と時代と共にその姿を変えています。そして2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催に向けて、更に近代的な姿に生まれ変わろうとしています。「寅さん歩」で東京を歩き回っている寅次郎は「東京にこんなところもあるのだ！」と思わせる場所に出会い、感動しました。新シリーズとして取り上げ、紹介します。都民暦約4年の「寅次郎基準」で選んでおりますので、ご容赦下さい。最寄り駅は代表例です。

～ 荒ぶる川の歴史を学びました ～

【荒川知水資料館】

北区志茂 5-41-1 最寄駅 JR 埼京線 赤羽駅

「荒川知水資料館」は赤羽駅東口から約20分の地にあり、ウォーキング例会で訪問しましたが、時間が足りず、再度訪問して学び直しました。

「荒ぶる川=荒川」は江戸の昔から花火や花見で脚光を浴びる「隅田川」に比べて、地味な存在でよく知りませんでした。

荒川は奥秩父 甲武信ヶ岳を水源にして、埼玉県、東京都を流れて東京湾に注ぎます。江戸時代は「大川」と呼ばれていた「隅田川」は「旧荒川」のことで、同じ川と知りました。江戸時代から下流は「日本堤」や「墨田堤」など市街地を守るための洪水対策が行われていましたが、上流から中流部は対策が行われず、頻繁に洪水が発生しました。

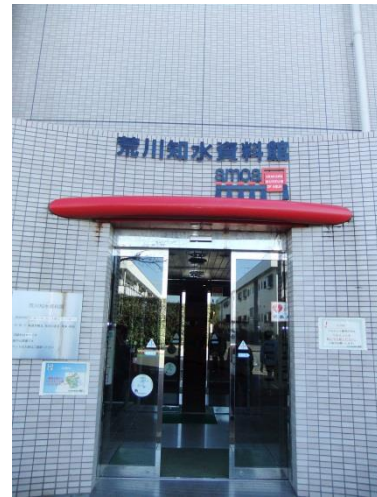
特に明治43年（1910年）の大洪水では浸水家屋27万戸、被災者150万人、死者369名（利根川筋も含む）の甚大な被害を蒙りました。

「荒川の洪水対応能力」を向上させるため、現在の岩淵水門（北区）を起点に隅田川とは別に人工の放水路を開き、荒川の水を二分して東京湾に流そうという「荒川放水路建設」が計画されました。

明治44年（1911年）着工した、この事業は関東大震災も乗り越え、20年

かけ、延べ約 310 万人もの人々が工事に携わり、昭和 5 年（1930 年）完成しました。この人工的に開削された「荒川放水路」が現在の「荒川」で、昭和 40 年（1965 年）新河川法により「荒川」が正式名になったそうです。

工事の総指揮者の青山士（あきら）氏は自費でパナマ運河工事に日本人技師として唯一参加し、帰国後、荒川放水路と岩淵水門の基礎工事にその力量を発揮しました。



荒川知水資料館建物と正面玄関



パンフレットの空撮写真（英字は各種の碑の位置）



荒川放水路 建設からの100年



旧岩淵水門(赤水門)



岩淵水門(青水門)

写真上の岩淵水門（青水門）の先が隅田川

表題右上の写真は大正 13 年(1924 年)竣工された岩淵水門(今の旧岩淵水門)です。この竣工で放水路全川に水を通す通水式が行われました。

新岩淵水門は昭和 57 年(1982 年)に竣工されています。

放水路の完成で荒川の洪水が抑制されましたが、昭和の初期から 10 年間で 3 度も計画高水位を上回る大きな洪水が発生しています。中でも昭和 22 年(1947 年)のカスリーン台風は荒川のみならず東日本全域に大きな爪痕を残しました。でも荒川放水路がなかったら東京のまちの姿や日本の経済発展は今の状況と大きく違っていたかもしれません。

昭和 26 年(1951 年)から荒川放水路の改修工事の告示が行われ、低水路拡幅などの工事が進められました。更に高潮堤防や高規格堤防(スーパー堤防)の整備が行われました。

平成 19 年 9 月(2007 年)に首都圏を襲った台風 9 号の洪水時でも荒川放水路

のおかげで東日本大震災に匹敵する損害を免れたと冊子「荒川放水路変歴誌
～もっと知っておきたい荒川放水路の歴史と効果～」は締めくくっています。

過去の到達水位や荒川のデータは次の通りです。



〔過去の到達水位〕 上から

昭和 22. 9. 16	
カスリーン台風	8.6m
昭和 16年 7. 23	
台風	8.07m
昭和 33. 9. 27	
狩野川台風	7.48m
昭和 3年 8. 3	
台風	7.30m
昭和 13年 9. 2	
台風	6.48m
平成 11年 8. 15	
熱帯性低気圧豪雨	6.30m



上流の新荒川大橋方面

〔荒川のデータ〕

水源・甲武信ヶ岳の標高	2,475m
一級河川・荒川の全長	173k m
荒川の流域面積	2,940k m ²
放水路部分の長さ	22k m
荒川の流域人口	約 980万人
荒川全流域の人口密度	約 3,300人/k m ²

次回は 江戸・東京の祭-54 (新しい祭-12) です。

平野 寅次郎 拝